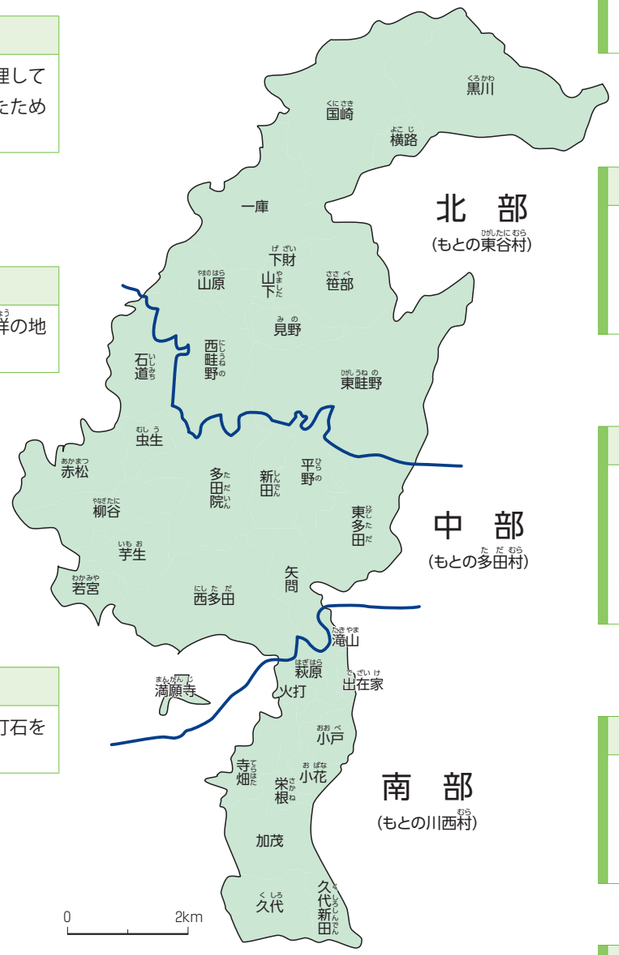
川西市域の地名の由来

明治時代の資料をもとに作成しているため、現在の住居表示とは異なるものがあります。〔「かわにし 川西市史第８巻」〕

川西市の各地域には地名にまつわるさまざまな由来や伝承があります。主なものを見てみましょう。

川西市域の古くからの地名



一庫
古来この地に豪族が管理していた屯倉（庫）があったためと考えられている。

清和台
川西市は清和源氏の発祥の地であることによる。

川西
地名は立地に由来し、猪名川の西に位置するところから名づけられた。

東谷
妙見山の南西にある三つの盆地のうち、宝塚市の西谷、猪名川町の中谷に対して東にある谷ということによる。

多田
平安時代から地名として使われている。丹波地方に通じる道や広い平原があり、農民が開発し、田田邑とよんだことに由来する。

火打
西にある石切山から火打石を産出したことによる。

鼓ヶ滝
猪名川の岩場を流れる急流では、水が岩肌に当たって鼓のような音を立てていたことによる。

加茂
この地域に古くから根付いた鴨君または鴨部祝という豪族の名前に由来する。

絹延橋
機織り・多色染めをする際に、猪名川の清流で織り布を洗って河原に干したことによる。

矢問
源満仲が神託により放った矢の行方を尋ねた（問うた）場所であることから名付けられた。

第2章 川西市の歴史

加茂遺跡

西畦野下ノ段・井戸遺跡　〔兵庫県立考古博物館提供〕

勝福寺古墳　石室

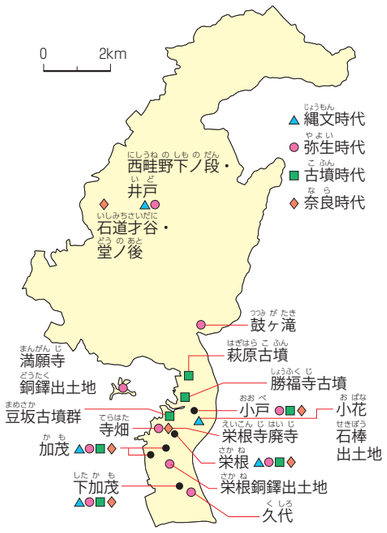
多田神社

縄文土器

① **土器棺**　乳児を埋葬するための土器で作られた棺です。埋葬の習慣があったことがうかがえます。
② **土器棺**　①と同じですが、少し小さいのがわかります。
③ **土器棺合蓋**　①・②の棺の合蓋です。
④ **縄文土器**　煮炊きや貯蔵のために用いられた深鉢の一部です。表面に文様がほどこされているのがわかります。
⑤ **縄文土器**　縄文時代後期の土器で深鉢の一部です。
⑥ **縄文土器**　縄文時代晩期の土器で深鉢の一部です。
⑦ **石皿**　木の実などを食料とするため、砕く際に用いられました。
⑧ **石冠**　縄文時代に使用された石製の道具の一種で、祭祀の道具とされています。近畿地方で最も西で発掘された非常にめずらしいものです。

石冠

1 縄文・弥生時代の遺跡



川西市内の古代の遺跡分布図

縄文時代に使用された祭祀の道具には、他にどのようなものがあるか調べましょう。

1 縄文時代の遺跡

縄文時代は、今からおよそ1万年前から紀元前4世紀ごろまでの長い時代です。人々は野生の動植物をとり生活していましたが、やがて定住のための集落をつくり、食物を煮炊きするための土器（縄文土器）や、狩猟具としての弓矢などを使い始めました。

川西市では、縄文時代でも終わりごろの後期・晩期の集落が加茂・下加茂・栄根など南部に集中して営まれていました。また、小花では後期の石棒が出土しています。

川西市南部では、加茂遺跡で縄文時代の後期、栄根・下加茂遺跡で縄文時代の晩期の土器が出土しており、それぞれ小さな集落が営まれていたと考えられています。なかでも加茂遺跡の後期の集落は、遺跡西部で墓や住居の柱の跡の穴が見つかっており、直径約50 mの範囲に広がっていたことがわかっています。

縄文時代の終わりごろの集落については、各遺跡ともわずかな土器の出土のみで明らかでありませんが、いずれも弥生時代直前のもので、稲作の始まる弥生時代との関係が注目されます。加茂遺跡では、縄文時代の終わりごろのものと考えられる祭祀具の石冠が出土しています。

加茂遺跡から出土した土器

加茂遺跡から出土した石器

2 弥生時代の遺跡　▶ p.30-31

弥生時代は紀元前4世紀ごろから紀元後3世紀ごろまでの時代です。川西市南部では、弥生時代の初めごろに栄根・下加茂遺跡で小さな農耕集落が営まれ始めます。弥生時代の中ごろになると、伊丹台地上に加茂の集落が誕生し、大きな集落となります。加茂の大集落は、水田に使う土地や水の利用をめぐる争いを通して、周辺の栄根・下加茂・小戸などの小集落を支配するようになりました。このような動きを通して、加茂の大集落には王のような有力者が存在し、川西市南部に稲作農耕、交易、祭祀などを共にする地域社会をつくっていたと考えられます。

1911（明治44）年に、台地の東斜面下の平坦地から「栄根銅鐸」が発見されました。このことにより、当時は、邪馬台国の発見の可能性があるともされました。その後、加茂遺跡では1952（昭和27）年から2023（令和5）年までの間に320回にわたって発掘調査が行われ、2000（平成12）年には国の史跡に指定されました。加茂遺跡は、周辺の土地より約20 m高い台地上に位置し、東西約800 m、南北約400 m、約20haもの規模で、東部にたて穴住居の並ぶ居住区、西部に方形周溝墓や木棺墓の並ぶ墓地のあることが明らかになっています。また、何重もの環濠が東部居住区の台地の崖以外の部分を囲み、さらに遺跡全体を囲む外濠の可能性があるなど、戦いに備えた厳重な防御性がうかがえます。

邪馬台国

3世紀ごろの倭（日本）にあった国です。そのころ、倭は小さな国に分かれ、長い間争いが続いていましたが、諸国が卑弥呼を倭国の女王にしたところ争いが収まったとあります。所在地については九州北部もしくは畿内にあったという説が有力ですが、どちらにあったのかはいまだ結論が出ていません。

加茂に大集落ができたのはどのような条件がそろっていたからかな。

弥生時代中期の加茂遺跡

大型建物・方形区画

現在の鴨神社の北側から、他の住居と異なる大型掘立柱建物の跡が見つかっています。この建物は板塀で囲まれていたと推測されており、集落を統括した人の住居や宗教的な建物など、集落の主要施設と考えられます。

大型掘立柱建物模型

斜面環濠

遺跡南東側の高さ約 20 mの斜面には、推定延長約 300 mの環濠が掘られており、中心居住区の防御を固めたものと考えられます。

斜面環濠での戦い（想像図）

方形周溝墓

遺跡の西部には、墓の周りを四角く溝で囲む方形周溝墓群が広がっています。

環濠入り口通路遺構

環濠で何重にも囲まれた中心居住区への入り口通路で、ここからしか入れないようにくふうされています。

環濠入り口模型

たて穴住居

環濠内外の居住区では、たて穴住居跡が多数見つかっています。直径 6 mほどの円形のものが多く、8～10 mの大型のものもあります。

最盛期には、約 100 軒の住居が存在したと考えられます。

たて穴住居模型

栄根銅鐸

1911（明治 44）年、東側斜面下の平坦地から偶然発見されました。突線鈕Ⅴ式という型式の、復元高 114cm の大きな銅鐸で、弥生時代後期（2 世紀ごろ）のものです。現在は東京国立博物館に所蔵され、川西市文化財資料館では複製を展示しています。

水田

発掘調査では見つかっていませんが、台地下の最明寺川沿いでは、水田が営まれていたと考えられます。

加茂遺跡（弥生時代中期集落）の特徴

●大規模であること

東西約 800 m、南北約 400 m、約 20ha の広さで、甲子園球場に例えると約 5 倍の大きさです。最盛期でおよそ 500 人もの人々が住んでいたと考えられます。

●区分けが明らかであること

加茂遺跡は環濠で囲まれた中心居住区、環濠の外の居住区、墓地などから構成されています。中心居住区の中央には、方形区画に囲まれた大型建物があったと考えられます。

●防御性が高いこと

落差 20 mの台地の突端という立地に加えて、中心居住区を囲む何重もの環濠と入り口通路、斜面の斜面環濠、居住地と墓地をまとめて囲む外濠などで集落を防御していました。

勝福寺古墳石室入り口

勝福寺古墳石室　有力者を埋葬した部屋。

2 古墳時代の遺跡

1 勝福寺古墳と周辺の遺跡

古墳時代には、各地域を支配する王のような有力者が現われ、その死にあたって大規模な古墳を築いていました。川西市をふくめた地域では、4 世紀に宝塚市域の万籟山古墳が築かれ、古墳時代後期の 6 世紀には、川西市南部の平野を見下ろす丘陵上に横穴式石室を備えた勝福寺古墳が築かれています。

勝福寺古墳は、明治時代に発見されました。発見当初は異なる時期に築かれた二つの古墳が合わさったものと考えられていましたが、2001（平成 13）年から 2004（平成 16）年の調査によって、墳丘は前方部を南に向けた全長約 40 mの前方後円墳だということがわかりました。横穴式石室は後円部、木棺は前方部にあたります。埋葬施設の中心は横穴式石室で、有力者を埋葬した部屋の幅は約 2.3 m、全長約 9 mになります。この古墳からは、中国から伝わったと思われる銅鏡や銀の飾りがある鉄刀、金環、管玉など豊富な副葬品が発見され、川西市南部を支配した有力者が葬られた墓ではないかと考えられています。石室に通じる通路の入り口外側には、幅 1.4 m、長さ 1.6 mのやや小型の石室も見つかっています。石材はかなりなくなっていましたが、多数の須恵器を中心とした副葬品が埋葬当時に置かれた状態で出土しました。さらに、後円部を中心に埴輪が出土しました。大半は円筒埴輪で、他に朝顔形埴輪や甲冑形埴輪なども出土しています。発掘調査に

横穴式石室

横方向に開口する石積みの墓室。死者を納める部屋と外に通じる通路とで構成されています。

副葬品

死者を埋葬するときに、いっしょに納められたもので、古墳からは刀やよろい、かぶと、装飾品などが見つかっています。

須恵器

古墳時代に作られた高温で焼かれたかたい土器のことで、中国や朝鮮半島から渡ってきた人たちによって伝えられました。

神戸新聞　2001年（平成13年）8月10

前方後円墳と判明

2円墳「定説」の川西・勝福寺古墳

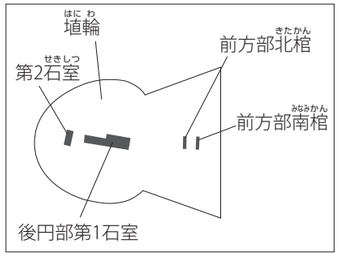
阪大と市教委

大王擁立の有力者？

あす現地で説明会

勝福寺古墳の発掘調査の様子を伝える新聞
〔神戸新聞、2001年８月10日〕

勝福寺古墳円筒埴輪



勝福寺古墳の構造

よって見つかった埴輪が、尾張地域（現在の愛知県西部）の埴輪とよく似た作り方をされていることがわかり、勝福寺古墳の被葬者が遠隔地の豪族と特別なつながりをもっていたことも浮かび上がってきました。

縄文時代から古墳時代の海岸線は現在の海岸線と比べて内陸にあり、現在の阪急電鉄神戸線の辺りであったと考えられています。栄根遺跡からは木をくりぬいて造った木舟が見つかっており、猪名川を利用して、他地域との交易が盛んに行われていた可能性があります。

六鈴鏡　円盤状の銅鏡の周りに鈴を六つ付けています。

銀象嵌龍文刀　鉄刀の柄元金具に龍の文様の象嵌をほどこしています。タガネという工具で文様を彫り、銀線を埋め込んでいます。

金環・銀製梔子玉　金でできた耳飾りと銀でできたくちなしの実の形をした玉を輪の形にした首飾りで有力な埋葬者の装飾具。

畝野牧（推定）の範囲
〔兵庫県立考古博物館提供〕石道才谷・堂ノ後遺跡がある小盆地は、面積が約13万m²あり、三角形に近い形をしています。三角形の１辺を猪名川が流れ、他の２辺は山でふさがれているため、牧場としては管理しやすい地形だといえます。

石道才谷・堂ノ後遺跡遺構平面図
〔兵庫県立考古博物館提供〕 掘立柱建物跡は、約9.6m×約4.8mで、１辺約50～60cmの長方形の柱の穴が14か所見つかっています。

3 奈良時代の遺跡

遺構・遺物
昔の建物などやその跡、昔の人が使った物のことをいいます。

掘立柱建物
礎石を使わず、地面に穴を掘ってそのまま柱を立てて造った建物のことです。

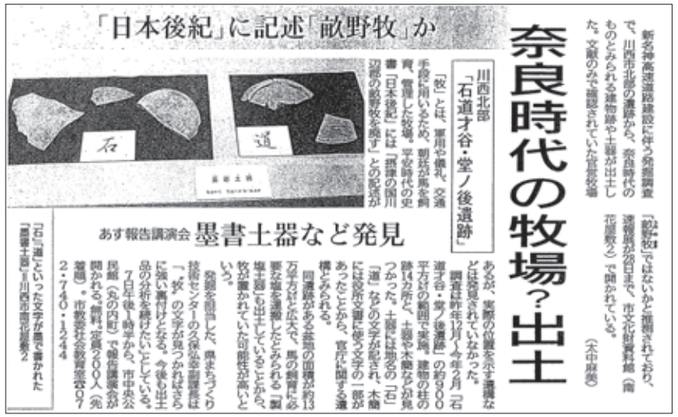
木簡
文字などを書き記した木の札。ふつうは長さ15～30cm前後、幅3cm前後で、数枚をとじたものが書物の原形となりました。

旧河道
かつて川が流れていた場所のことです。

1 川西の最近の発掘調査　石道才谷・堂ノ後遺跡

石道才谷・堂ノ後遺跡は、新名神高速道路の建設に先立って、1998（平成10）年度と2008（平成20）年度に兵庫県教育委員会が実施した調査で発見されました。2012（平成24）年度に確認調査を実施した結果、奈良時代の遺構や遺物が発見されたため、本発掘調査に至りました。本発掘調査は、2013（平成25）年12月から2014（平成26）年２月にかけて行われ、奈良時代から平安時代初めの役所の可能性のある掘立柱建物跡１棟の遺構が発見されるとともに、多数の遺物が出土しました。また、墨書土器や木簡、斎串などの木製の祭祀具や大量の製塩土器が見つかっています。注目されるのは、旧河道から文字が記された木簡が１点、墨書土器が30点以上見つかったことです。

墨書土器とは、土器に墨で文字を書いている土器のことです。墨書土器の出土自体はさほどめずらしいことではありませんが、今回のようにせまい範囲で30点を超えるものが出土するのはめずらしいことです。墨書土器の文字には、「石」「道」がそれぞれ複数あるほか、「石道」「十」「東」「屋」などが見られました。このことから、石道という地名が奈良時代までさかのぼる可能性が出てきました。木簡は川西市で初めての出土例となります。木簡には文字が残されており、「莫」であることがわかりました。ただ、


「日本後紀」に記述「畝野牧」か

奈良時代の牧場？出土

新名神高速道路建設に伴う発掘調査で、川西市北部の遺跡から、奈良時代のものとみられる建物跡や土器が出土した。文献のみで確認されていた官営牧場

（畝野牧）ではないかと推測されており、遺構現が28日まで、市文化財資料館（南花屋敷2）で開かれている。（太中麻美）

川西北部「石道才谷・堂ノ後遺跡」

「牧」とは、軍用や農耕、交通手段に用いる馬、牛などを飼育、管理した牧場。平安時代の史書「日本後紀」には「摂津国川辺郡の畝野牧を廃す」との記述が

あす報告講演会 墨書土器など発見

あるが、実際の位置を示す遺構などは発見されていなかった。

調査は昨年12月～今年2月、「石道才谷・堂ノ後遺跡」の約900平方メートルの範囲で実施。建物の柱の跡14カ所と、土器や木簡などが見つかった。土器に墨で文字が記され、木簡には数所に墨で文字の一部があったことから、官庁に関する遺構とみられる。

同遺跡がある盆地の面積が約13万平方メートルと大きく、馬の飼育に必要な塩を運搬したとみられる「製塩土器」も出土していることから、牧が置かれていた可能性が高いという。

発掘を担当した、県まちづくり技術センターの久保弘幸副課長は「『牧』の文字が見つかればさらに強い裏付けとなる。今後も出土品の分析を続けたいとしている。

7日午後1時半から、市中央公民館（丸の内町）で報告講演会が開催される。無料。定員200人（先着順）。市教育委員会07 72-740・1244

「石」「道」といった文字が墨で書かれた墨書土器＝川西市花屋敷2

発掘調査の様子を伝える新聞〔神戸新聞、2014年９月６日〕

文字の意味がはっきりしているわけではありません。斎串や馬形など祭祀具を用いる「祓い」は、奈良時代の役人の仕事の一つであったとされています。製塩土器の大量出土も注目されます。家畜の飼育には塩が不可欠で、特に馬は多量の汗をかくため塩を与える必要性が大きいからです。

このことから、石道才谷・堂ノ跡遺跡は、一般的な農村集落ではなく、役所と関わりのある遺跡であったと考えられます。

川西市北部地域の奈良時代の様子については、あまり明らかではありません。ただし、808（大同３）年に「摂津国川辺郡畝野牧廃す」と平安時代の史書である「日本後紀」に記されています。奈良時代の牧は牧場のことで、「畝野牧」は官営牧場だと考えられています。「畝野牧」は、現在の畦野周辺と推定されていましたが、畦野では奈良時代の有力な遺構は見つかっていません。しかし、石道才谷・堂ノ後遺跡はこのころの年代と合致するため、「奈良時代の牧場発見か？」と報じられました。

こうして、石道才谷・堂ノ後遺跡が畝野牧に関連する遺跡であったと考えられるようになりました。しかし、牧であったことを証明できる馬具や馬の埋葬など有力な証拠に欠けていることもあり、石道才谷・堂ノ後遺跡＝畝野牧説と断定することはできないというのが現在の結論です。

墨書土器〔兵庫県立考古博物館提供〕

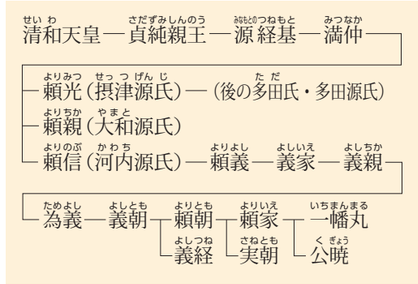
出土した木簡〔兵庫県立考古博物館提供〕

木製祭祀具斎串（上２点）・馬形（右下）
〔兵庫県立考古博物館提供〕

源満仲公御神影図〔多田神社所蔵〕

多田神社　清和源氏の霊廟として、源満仲、源頼光、源頼信、源頼義、源義家をまつっています。

満願寺　満願寺は清和源氏の祖といわれる源満仲が信仰した寺院です。歴代源氏一族の祈願所として信仰され、発展しました。



源氏の系図

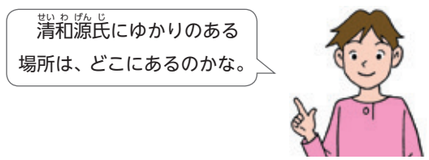
第2章

4 清和源氏 ゆかりの地 川西

源満仲像（川西池田駅前）

1 清和源氏の祖満仲の根拠地

川西市は清和源氏発祥の地といわれています。源氏というと、12世紀末に鎌倉幕府を開いた源頼朝が代表的人物として挙げられます。その先祖の源満仲の根拠地が多田盆地でした。満仲は平安時代に京都の貴族に仕えた武士で、10世紀の中ごろに地形・水利・交通の便などに目をつけて多田盆地に移り住み、山野を耕地に開発して大きな勢力をもつとともに源氏発展の基礎を築きました。満仲が造った寺院は多田院とよばれ、武士の政府である、鎌倉・室町・江戸幕府からも手厚い保護を受けました。その後、明治時代には、政府の神仏分離政策によって寺院が廃止され、多田神社となりました。



2 源氏の系図

清和天皇の子孫である清和源氏は満仲の３人の子により、摂津源氏、大和源氏、河内源氏に分かれました。摂津源氏からは多田地域を治めた多田源氏や、能勢地域を治めた能勢氏などを輩出しました。河内源氏からは後に鎌倉幕府を開く、源頼朝を輩出しました。

3 川西のシンボル「きんたくん」

川西市のシンボルキャラクターであるきんたくんは源満仲の息子、頼光の家来である四天王の一人の坂田金時（幼名、金太郎）という人物をモデルとしています。童話や伝説では足柄山で熊と相撲をとったり、頼光とともに鬼の頭領である酒呑童子を退治したといわれています。金時の墓は、川西市の満願寺と小童寺にあり、満願寺では毎年５月５日に「金時まつり」が開催されています。

きんたくん　©川西市 2008

コラム 多田院の鳴動

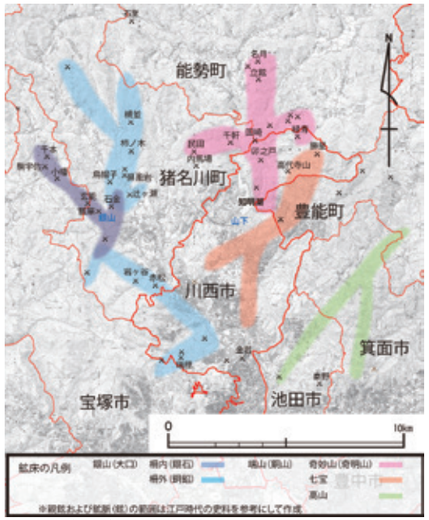
多田で武士団を形成し、晩年には信仰生活を営んだ源満仲は、今からおよそ1000年前に亡くなりました。死の間際に満仲は、「自分が亡くなった後も、多田院の霊廟にて、我々源氏一門を守ろう。それだけでなく鳴動をもって国内の安全か危険かを知らせよう。」と遺言したと伝えられています。

鳴動とは音を発してゆれ動くことで、事変の急を天下に予告したといわれています。鳴動があると、多田院は直ちに幕府に報告しました。多田院の鳴動はめでたい知らせであると伝えられています。

コラム 大江山の鬼退治

大江山（京都府）には酒呑童子とよばれる鬼の頭領がいたと伝えられています。酒呑童子は都に現れては暴れまわっていました。

きんたくんのモデル、坂田金時は源満仲の息子、頼光とともに頼光四天王（頼光の率いた４人の家臣）の一人として鬼退治に参加し、酒に酔わせたところを退治したと伝えられています。頼光には他にも土蜘蛛退治の伝説が存在しています。



多田銀銅山の範囲と鉱床
〔猪名川町教育委員会作成図面〕

多田銀銅山の坑道（猪名川町　青木間歩）

第2章

5 多田銀銅山の発展

豊臣秀吉〔高台寺所蔵〕　多田銀銅山は16世紀（天正年間）に豊臣秀吉の直轄地となりました。

間歩

鉱山の地下に掘った道のこと。坑道。

1 多田銀銅山の歴史と特徴

多田銀銅山は兵庫県川西市、猪名川町、宝塚市、大阪府池田市、箕面市、能勢町、豊能町一帯に広がる鉱床群の名称です。「多田」という地名は源満仲が開いた「多田荘」にちなんでいると考えられています。この多田銀銅山を本格的に開発したのが豊臣秀吉であり、採掘量の多い間歩には、瓢箪間歩や台所間歩など秀吉にゆかりのある名前が付いています。

奈良時代、東大寺の大仏を造る際に、奇妙山神教間歩（川西市国崎辺り）から掘り出した銅を寄進したという言い伝えや、平安時代、源満仲に銀山の金懸間歩（猪名川町）で採れた銀を献上したという記録（伝承）が残されています。

戦国時代から安土桃山時代にかけて、豊臣秀吉は鉱山開発などで得た豊富な軍資金を元に全国を統一しましたが、多田銀銅山も大いに貢献していたと考えられます。

2 にぎわう銀山三千軒

江戸時代になると銀をふくむ大鉱脈が発見され、現在の川西市北部と猪名川町の銀山地区は幕府の直轄地になりました。銀山地区には代官所（幕府の役所）が置かれ、「銀山三千軒」と称されるほどにぎわいました。多田銀銅山は、銅山である奇妙山・七宝・高山と、銀山である親鉱の４本の主鉱脈からなり、最も多いときには 3000 もの間歩があったという記録もあります。

1688（元禄元）年には川西市山下町にも役所が置かれました。山下町と銀山町地区の２か所に限って製錬を行うものとし、他所での製錬は禁止され、徹底した管理体制がとられました。当時、製錬は吹屋で行われていましたが、そこで使われていた道具や鉱滓（製錬の過程で出たかす）が今も残っています。

それらは、市内の下財町（当時、鉱山労働者を「下財」とよびました）にある川西市郷土館や猪名川町の多田銀銅山悠久の館で見ることができます。多田銀銅山は、1680 年ごろから採掘量も減少し、明治時代に入ると資本家による鉱山経営が行われましたが、1973（昭和 48）年に閉山しました。その後、2015（平成 27）年に、猪名川町にある一部が国の史跡に指定されました。

●吹屋（製錬するところ）で用いられた道具●

はし　高温になったるつぼなどをはさむ道具。

ひやしわ　金属を炉に出し入れするときに使う道具。

ゆくみ（一部）　とけた金属をかき出す道具。

るつぼ　高温を利用して金属をとかす耐熱容器。

堀家製錬所跡（猪名川町）　ここには鉱石を選別する「機械選鉱場」も造られましたが、一度も使われることなく1907（明治40）年に休止されました（写真は機械選鉱場跡）。

製錬

鉱石から金属を取り出すこと。鉱石を熱して、鉱石から金属を液状にして取り出します。

第2章

コラム

川西市郷土館

川西市郷土館は、銅の製錬をしていた旧平安家住宅を利用して、1988（昭和 63）年 11 月に開館しました。次いで 1990（平成 2）年 11 月には、川西市内の小戸地区にあった洋館の旧平賀家住宅を移築復元しました。

旧平安家住宅と旧平賀家住宅は、国登録有形文化財（建造物）に登録されており、旧平安家住宅は兵庫県景観形成重要建造物にも指定され、旧平賀家住宅は「ひょうごの近代住宅 100 選」にも選ばれています。

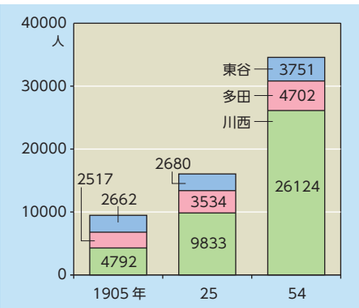
鷲の森遊泳場
〔「宝塚・伊丹・川西・猪名川の今昔」郷土出版社〕

1910年ごろの呉服橋付近
〔池田市立歴史民俗資料館所蔵、池田絵はがき「池田側より西岸呉服橋及び劇場（川西座）を望む」〕

1955 ～ 1965年ごろの市議会議員選挙
〔「目で見る宝塚・伊丹・川西・猪名川の100年」郷土出版社〕

6 川西市の誕生

多太神社の横にある地蔵尊



川西市域の人口の推移

1 江戸時代のにぎわい

江戸時代の川西市の様子を知る手がかりとして、今も残る道標が挙げられます。市内最古のものは、江戸時代前期の1672（寛文12）年に作られたもので、加茂にあります。この辺りは古くから、箕面市と宝塚市を結ぶ宿場街道として重要な役割を果たしていました。

また、多太神社の東側に小さなほこらがあって、その中の地蔵尊にも道標が刻まれています。地蔵尊の両脇の文字は、この道を右に進むと平野温泉場（今の平野駅付近）に着き、左へ進むと能勢方面に通じることを示しています。平野湯は、江戸時代には、有馬湯、一庫湯とともに、摂津三湯の一つに数えられ、塩川の流れに沿って、温泉宿が建ち並び、妙見山への参拝者や湯治客でにぎわったようです。

他にも、川西市歴史民俗資料館には当時の旧家が残されており、くらしぶりがうかがえます。

2 川西市の誕生

1889（明治22）年になると、全国で実施された市制・町村制に基づいて、現在の川西市域には川西村・多田村・東谷村が生まれました。1925（大正14）年には、川西村は町制を実施して川西町となり、1954（昭和29）年、町村合併促進法に基づいて、川西町・多田村・東谷村の3町村が合併して川西市が誕生しました。これにより、兵庫県で18番目の市として新しくスタートしました。

川西市の歩み

時代	年（年号）	主な出来事
旧石器	2万年前	加茂でナイフ形の打製石器が使われる。
縄文	4000年前	加茂・栄根に石器や縄文土器を使う人が住み始める。
弥生	紀元前1世紀	加茂に大集落ができる。
古墳	6世紀前半	勝福寺古墳が造られたと考えられる。
飛鳥	600年ごろ	長尾山丘陵（宝塚市～川西市）に群集墳が造られる。
奈良	724～728（神亀元～5）	満願寺が建てられたと伝えられる。
	753（天平勝宝5）	聖武天皇によって栄根寺が建てられたと伝えられる。
平安	968（安和元）	源満仲が多田に住み始める。
	970（天禄元）	源満仲が多田院を建てる。
	11世紀	このころより多田銀銅山の採掘が始まる。
鎌倉	1200年ごろ	東多田に集落が営まれる。
南北朝	1300年代後半から	多田院が足利氏の崇敬を受ける。
室町	1415（応永22）	多田院が鳴動したと伝えられる。
戦国	1500年ごろ	塩川氏が山下城を居城として周辺を治める。
安土桃山	1586（天正14）	豊臣秀吉から遣わされた片桐・池田などの軍に山下城が包囲され、塩川国満が切腹する。
江戸	17世紀（寛文年間）	多田銀銅山が最盛期をむかえる。
	1811（文化8）	伊能忠敬が川西市域を測量する。
明治	1884（明治17）	三菱が、日本初の飲料水工場を平野に創設する。
		「平野水」（後の三ツ矢印 平野シャンペンサイダー）として発売を開始する。
	1889（明治22）	市町村制施行により、川西村・多田村・東谷村が生まれる。
大正	1913（大正2）	能勢電気軌道（現在の能勢電鉄）能勢口～一の鳥居間が開通する。
	1925（大正14）	川西村が川西町となる。
昭和	1945（昭和20）	川西市域に空襲が繰り返され、この年だけで5人が犠牲となる（戦没者名簿には、824人の犠牲者の名前が記載されている）。
	1954（昭和29）	8月1日に川西町・多田村・東谷村が合併し、川西市となる。
	1967（昭和42）	多田グリーンハイツなどの大規模住宅団地の販売が始まる。
平成	1995（平成7）	阪神・淡路大震災で川西市も被災する。
	2004（平成16）	川西市が市制施行50周年をむかえる。
	2006（平成18）	第61回国民体育大会「のじぎく兵庫国体」の弓道競技を開催する。
	2014（平成26）	川西市が市制施行60周年をむかえる。
	2018（平成30）	キセラ川西プラザが完成する。
令和	2022（令和4）	中学校給食が実施される。
		市立総合医療センターが開院する。

小童寺

美女丸・幸寿丸・仲光の墓

コラム

「三ツ矢」の由来

清和源氏発祥の地、多田神社でまつられる源満仲の伝説があります。伝説では、平安時代に満仲が居を構えようと住吉大社で祈りをささげたところ、「矢の落ちたところを居城とせよ。」とのお告げがあり、天に向かって矢を放つと、多田沼の「九頭の大蛇」に命中しているのが発見され、その場所に館を構えたとされています。そのときに、矢を探しあてた男に「三ツ矢」の姓と三本の矢羽根の紋が与えられたそうです。

三ツ矢塔

美女丸伝説 ―西畦野・小童寺―

西畦野にある小童寺には、悲しい伝説が残されています。

10 世紀に多田院（現在の多田神社）を建立した源満仲は、子の美女丸を僧侶にするため、中山寺へ修行に出しました。しかし、武士として生まれた美女丸はこれを不服に思い、僧侶の修行から抜け出し武芸のまね事をしたり、罪のない人々に乱暴を働いたりしていました。美女丸が 15 歳になったある日、満仲は修行の成果を尋ねましたが、和歌や管弦はもとより、経文も読むことができないのを知った満仲は怒り、重臣の藤原仲光に「美女丸を斬れ」と命じました。

仲光は若君に刃を向けることができず悩んでいました。仲光の一人息子、幸寿丸は父の苦しみを知り「私が身代わりに」と父に申し出たため、仲光は流れる涙をこらえ、わが子を斬り、美女丸をひそかに比叡山に送り出しました。

後にこれを聞いた美女丸は、修行に励み、名僧となり、幸寿丸のために小童寺を建てました。

「三ツ矢サイダー」は川西市の水から生まれた！

かつて平野地区に湧き出た温泉は、江戸時代、有馬湯、一庫湯とともに、摂津三湯の一つに数えられていました。

温泉は、江戸時代末期に衰退しましたが、この平野地区から湧き出る鉱泉が明治時代初期に理想的な飲料水（炭酸水）として紹介され、「サイダー」として商品化されました。

1884（明治 17）年には、鉱泉を利用した清涼飲料水「平野水」の製造工場が造られ、1907（明治 40）年には、炭酸水にフレーバーエッセンスを使用した「三ツ矢印 平野シャンペンサイダー」（後の「三ツ矢サイダー」）の製造が開始されました。

最盛期の大正時代には、工場で約 500 人が働き、当時では大規模な工場だったといわれています。また、「三ツ矢サイダー」は、能勢電鉄の主要貨物でした。平野の工場あとには、現在、「三ツ矢」マーク入りの建物があり、当時をしのばせています。

※マドリッド協定を受けて、1968（昭和 43）年に「シャンペンサイダー」から「三ツ矢サイダー」へ名称を変更しました。

第3章 川西市のまちづくり

大阪府池田市の五月山からのぞむ川西市内

黒川地区の里山

川西市役所

川西市議会